

「釣り合わない」と人気声優の幼馴染から逃げたこじらせOL、サプライズ再会で両想いが発覚し、濃厚セックスでとろとろに溺愛されてしまいました♡

三十分早く目が覚めたので、いつもより早く玄関に立つ。

玄関に置いた姿見で、出社前の身だしなみチェックをする。

ベージュのロングスカート、白のタートルネックに白のパーカーを羽織って、髪の毛は後ろで結び、ヘアオイルを馴染ませる。

事務員という仕事に派手さはいらないが、それにしても地味すぎて鏡を見るたびにちよつとへこむ。後輩は似たような格好をしていても可愛らしいのに。

私はそれ以上鏡を見るのをやめ、家の奥で洗濯機を回しているお母さんに「行ってきたす!」と声をかけた。

駅にあるコーヒーショップでカフェラテを買って、ついでにコンビニで何か甘いものを買おう。あと電車で座れたら本を読んで……。

三十分のアドバンテージを有意義に使うと思案しながら玄関の扉を閉めた瞬間、隣の家扉が開く音がした。驚いて隣を見ると、薄いグレーのスーツを着た女性が、ちょうど

隣の家から出てくるところだった。

私は「彼じゃない」という気持ちに「そりゃそうだよね……」と素早く折り合いをつけ、その女性に声をかける。

「ゆずさん！おはようございます！」

「あ、久しぶりねえ！」

隣に住む天野柚子さんは満面の笑みでこちらに駆け寄る。自然と私の足も動いて門の外で落ち合う。

「ちよつと見ない間に随分綺麗になって〜！」

「やめてください、恥ずかしいですよ」

柚子さんはとても良い人なので、口に出す言葉はきつと本心なのかもしれないが、私の自己評価とはかけ離れていて胸がちくりと痛む。

「お隣なのに全然会わないわね〜」

「柚子さんが朝から晩まで働きすぎなんです。でも元気そうで良かった」

元気よくとにこにこ笑う柚子さんの目元が、自然と彼を思い出させる。親子なのだから似ているのは当然だ。柚子さんに会うと、彼を思い出して苦しくなるからできるだけ接触を避けていたのに、早起きは三文の徳なんて嘘だ。

「じゃ、私そろそろ行くわ！遅刻しそうでタクシー呼んじゃった」

柚子さんはぺろりと舌を出し、肩をすくめる。美人なのに気取ったところがない彼女は、何だかいつもドタバタして落ち着きがない。遠くに見えたタクシーを、ヒールでわざわざ走って迎えに行き、転びそうになる柚子さんの背中をぼんやりと眺めた。私はずきずきと鈍く痛む心を、深呼吸して落ち着けるほかにできることがなかった。

「よし！」

気合い十分な私は、隣県の旅行雑誌を購入し、旅のしおり作りを始めていた。

みかんちゃんが帰ってくるまであと二日。会わないと決めてしまうと何だか気持ちが悪くなった。お母さんに「何で会ってあげないのよ」と言われる度にチクチクと胸が痛んだが、無理やり頭の端に押し込んだ。

有休も、課長から消化しろと言われていたので、思い切って十日分取った。大盤振る舞いの有休消化に合わせ、どうせなら豪華なホテルで豪華な料理をお腹いっぱい食べたいと、人気のリゾートホテルを予約した。決済のときはさすがに手が震えた。

計画を練りながら数日前に届いた、リゾートホテルの予約完了メールを確認していると一人用の部屋ではなく二人用の部屋を予約してしまったことに気がついた。

「嘘でしょ……」

リゾートホテルはさすがに高いな～と思っていたが倍額払っていた自分のバカさに呆れて怒りも湧いてこない。

「はあ……最悪……」

ベッドを背もたれにしてカーペットに座っていた私は、天井を見上げて泣きそうになった。

いや、泣いている場合じゃない。私が私のためにできるのは、この一世一代の高級旅行を思いっきり楽しむことだ。

「まず温泉でしょー、食べ歩きして、温泉に入っってー、スイーツ食べてー」

ふわふわした柔らかい素材の部屋着の袖をたくし上げ、気合を入れてノートパソコンの検索窓へリサーチ項目を入力する。

「わーこのイベント楽しそう！温泉の美肌効果ヤバそう！このお肉美味しそう絶対食べる！」と己を励ますように大声をあげながら記事を読む。休日の真っ昼間に大人の女がすることではない、という言葉が頭の隅に浮かんでくる。それを追い払いながら己を「楽しみ」という感情で励ましていく。

景気付けに音楽でも聞いてやろうと、ノイズキャンセリング機能付きのブルートゥースイヤホンで、子どもの頃に見ていた女兒向けアニメのオープニングを再生する。

入り口の扉から視線を外し、PCの画面に夢中になっていたせいで、自分がどのくらいの時間気が付かなかったのかも分からない。計画を練るのもひと段落ついて、コーヒーでも飲もうと伸びをして、部屋の扉が開いていることに気がついた。

視界の端に、人の足が見える。ドア枠に寄りかかるようにこちらを見ている誰かがいる。驚いて顔を上げると、目の前にはみかんちゃんが苦笑いしながら立っていた。

「久しぶり！随分楽しそうだったけど……」

「いやーっ！」

心臓が飛び出るってこういうことかと初めて理解した。動物が危険から逃れるように跳ねて、ベッドの上に後ずさる。震える手でクッションを盾のように構えた。

「……驚かせてごめんだけど、ちよつと驚きすぎ……っていうか怯えすぎじゃない？」

ちよつとサプライズで早くなつたけど、帰省するって伝えてもらつたと思つたんだけど、とみかんちゃんが笑う。

驚きすぎて、私の心臓は過労で止まってしまうんじゃないかと心配になるくらいばくばくしていた。

「おばさんに入れてもらつたんだけど、ノックしても気づかないし、扉開けても十分ぐらゐ気づかないんだもん、寂しかつたんだけど？」

こくこくと頭を激しく振って、そうですかと相槌を打つ。

お母さん、絶対に許さない。絶対、絶対許さないっ。

「そんな怯えなくても良いじゃん」

みかんちゃんの苦笑いがだんだん困つた顔になる。

「かーわいい……絶対逃さないから」

耳から頬、首にキスされ、犬が戯れるみたいに身体の上にのしかかれる。

「あっ♡あう♡」

同時に服の上から胸を揉まれ、もうクリトリスが硬くなりすぎて痛い。身をよじると、部屋着の裾から手が差し込まれた。冷たくはないが、慣れない感触に体がぶるりと震える。

「やつ、やだ……っ」

「顔が嫌がってないよ」

にっこり笑った目が糸になる。

タイミングが悪いのか良いのか、今日に限って身につけていたフロントホックのブラジャーは、何の防御にもならず、あっけなく砦を明け渡す。

「ふあああん！♡」

乳首に指先で触れられ、淡い快感がじわりと広がる。声でかいよ、と揶揄うように言われ、またじわりと涙が出た。

「やだ……やだ……」

「うんうん、嫌だねえ」

「きやうう！♡」

乳首をぎゅっと摘まれ、思わず腰が跳ねる。未知の快楽、未知の興奮に頭がついていかない。みかんちゃんの腕に縋り付くと、彼は嬉しそうに笑って、私にキスの雨を降らせた。「ね、舌出して」

言われるがままおずおずと舌を差し出すと、舌を舌先で辿るように舐められ、そのまま口の中を蹂躪される。

「んっ……♡ふあああ♡」

上顎をつんつんと触れられ、舌先で味わわれ、唾液が口端から溢れる。そんなことも気にならない位に、与えられる快感は新鮮で心地よくて、夢中で貪ってしまう。

「キスただけでそんなになつて、そういうの淫乱って言うって知ってる？」

「んっ♡んんう♡」

再び胸を揉まれ、今度は乳首を服の上から擦られる。

「んんっ♡んんっ♡」

直接触れられるより気持ちいい。それを察したのか、みかんちゃんも指を上下に高速で動かしてくる。

「あ、あ、あう♡」

「ん？乳首気持ちいい？」



快感に抗えないのなんてとうに知られている。それでも素直に頷くのは悔しくて、腕で口を塞いで目を逸らす。

「んー？乳首気持ち良くないの？こんなにコリコリしてるよ？」

「ん♡ん♡♡」

硬くなった乳首を摩擦され、腰が勝手に動く。媚びるように腰を擦り付けると、みかんちゃんは舌なめずりをしながら私を見下ろしてくる。

「はあ……マジで、あんま煽んじゃねえよ……」

ぼそりと呟かれた言葉に反論ができない。

煽って煽って、我慢できないようにしたらみかんちゃんの本心を知ることができるだろうか。私ばかり気持ちを知られて翻弄されて、悔しい。

「み、みかんちゃん、さ、触って……」

みかんちゃんの腕に手を伸ばし、指先だけで触れる。見上げたみかんちゃんの喉がごくりと上下した。

「さわつてえ……」

みかんちゃんに触れた指先で、部屋着のズボンに触れ、蝶々結びにした紐の輪っかに指を通す。誘うのなんて初めてで、はしたない自分が恥ずかしくて辛くて、大粒の涙がぼろ

ぼろと溢れた。

それでも何より、私はみかんちゃんの本心を知りたい。

みかんちゃんは顔を強張らせて、無言で私にキスをした。さっきみたいに弄ぶように舌を動かすこともなく、ただただ口の中を乱暴にまさぐられる。

「ん♡ん♡う♡♡」

蝶々結びにしたズボンの紐を一瞬で解かれ、準備をする間もなく手を下着の中へ突っ込まれる。

「あ！やだっ♡」

「湿ってる……」

汗でじっとりとしている下着の中を実況され、顔が熱い。覆い被さった身体を押し返そうとしたがびくともしなかった。それでも抵抗を続けていると、陰毛を引っ張られ、身体が飛び跳ねた。

「んい、痛いよおお♡」

「痛くて気持ちいいよお♡の間違いだろ？」

みかんちゃんは意地悪な顔でそう言うと、指を下着の最深部まで辿り着かせた。

割れ目にゆっくり指が差し込まれ、ぐっと中まで進入してくる。くちゆくちゅと水音が

響いて、羞恥に顔が歪む。

「どんだけ濡れてんだよ……」

みかんちゃんは挿揄うでも煽るでもなく、ただ切羽詰まったようにそう呟いて、指をぐいぐいと奥まで深く差し込んだ。